

國學院大學学術情報リポジトリ

縄文時代の斧状土製品の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 昭典 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002049

縄文時代の斧状土製品の研究

阿部 昭 典

要旨

縄文時代の「第二の道具」には、装飾品の範疇で捉えられるものがある。縄文早期には石製装飾品が出現し、次第に土製装飾品を加えて複雑化していく。縄文時代中期末葉には、斧状土製品が東北地方北部で出現し、岩手県を中心に局地的な広がりを出す。本土製品は、端部に貫通孔を有し、先端が尖る斧状を呈しており、全面に縄文が施文されたり、土器の文様に似た沈線文などが描かれる。これらの土製品の9割は破損し、完形率はそれほど高くない。また出土状況は、包含層や遺構覆土から出土するものがほとんどで、副葬品など特殊な出土状況を示すものがない。本土製品には使用痕や付着物がないことから、機能・用途に関しては不明なままである。しかし、局地的分布と短期間で消滅することは、「第二の道具」の特性として理解することができ、これらが系譜関係を持つかどうかは明確ではないが、後期前葉の鐸形土製品やその後のスタンプ形土製品などの土製垂飾品に、間接的につながっていくものと推測される。

キーワード

第二の道具、斧状土製品、装飾品、土製垂飾品

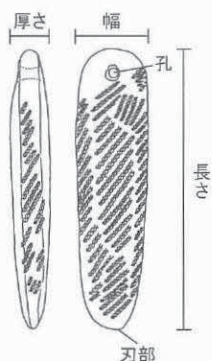
1. はじめに

人類における装飾品の出現は、大陸では約10万年前まで遡るという見解もあるが、日本列島での装飾品は約2万年前に出現が確認される（長沼 2010）。このような「第二の道具」（小林 1977）としての装飾品の出現は、非常に重要であると考えられる。日本の旧石器時代では、石製垂飾品や有孔石製品といった石製の装飾品が存在する。一方、縄文時代になると、早期中葉に垂飾用の玉類の製作が始まり、早期末葉には石製の珧状耳飾などが普及する（川崎 1998・2000）。縄文時代中期になると、装飾品の種類がより多様化し、土製装飾品である土製耳飾（耳栓）などが出現する（設楽 1983など）。そのなかで、中期末葉の東北地方では、「斧状土製品」と呼称される土製品が出現する。本土製品は、宮城県大衡村上深沢遺跡で初めて出土したものとみられ、先端部が尖るなど「斧」の形をしていることから名づけられたものである（後藤他 1978）。しかし、実際に磨製石斧などの斧を意識して製作されたものかは明らかではない。この種の土製品は、縄文時代研究のなかでほとんど注目されなかったこともあり、本土製品を扱った論考は確認できなかった。この斧状土製品は、縄文時代中期後半期に東北地方に分布するようであるが、実態は不明のままである。これらの土製品が

出現する中期末葉は、東北地方北部では前庭部付石組炉のような大形炉が広がり、土偶が一時的に衰退し、そのなかで本土製品が流行することも注目すべき現象である。

一方で、後期前葉になると東北地方北部では垂飾品とみられる「鐸形土製品」が広く普及し、十腰内Ⅰ式期を代表する土製品のひとつとなる。しかし、鐸形土製品も十腰内Ⅰ式期の比較的短期間で消滅するとみられる（阿部 2010cなど）。当該期は、土製品の種類も多様化し、懸垂可能な貫通孔を持つ土製品が多くなり、「手形・足形付土版」（遠藤 1986・1987）や「有孔土製品」などが局所的に製作される。その後も、同地域では後期後半期において、「スタンプ形土製品」や「分銅形土製品」などが広がる。これらの土製品には、形態的にはまったく系譜関係が認められないが、いずれも端部に貫通孔を持つことから吊り下げられるような形態を呈している。このことから、「土製垂飾品」として関係性を有している可能性は否定できない。これも「第二の道具」の特性によるものと言えるかもしれない。

東北地方における土製垂飾品の普及は、中期になってからであり、中期後葉の斧状土製品の出現は非常に重要であると考えられる。本土製品の出現と展開の過程を明らかにすることで、土製垂飾品の通時的



第1図 斧状土製品の名称と計測部位

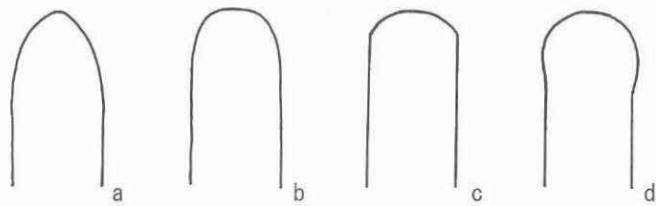


第2図 斧状土製品の分布図

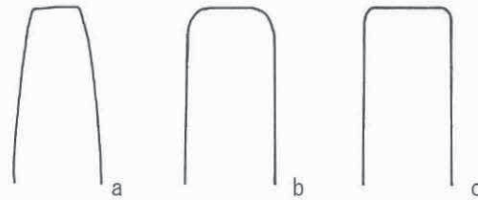
第1表 斧状土製品リスト

No	遺跡名	所在	No	遺跡名	所在	No	遺跡名	所在
1	槻ノ木遺跡	青森県・野辺地町	19	大館町遺跡	岩手県・盛岡市	37	中野台遺跡	岩手県・一関市
2	松ヶ崎遺跡	青森県・八戸市	20	大新町遺跡	岩手県・盛岡市	38	清水遺跡	岩手県・一関市
3	田代遺跡	岩手県・九戸村	21	川目A遺跡	岩手県・盛岡市	39	張山遺跡	岩手県・遠野市
4	御所野遺跡	岩手県・一戸町	22	湯沢遺跡	岩手県・盛岡市	40	下館銅屋遺跡	岩手県・一関市
5	馬場平2遺跡	岩手県・一戸町	23	久田野II遺跡	岩手県・花巻市	41	上野平遺跡	岩手県・藤沢町
6	仁昌寺遺跡	岩手県・一戸町	24	観音堂遺跡	岩手県・花巻市	42	長谷堂貝塚	岩手県・大船渡市
7	仁昌寺II遺跡	岩手県・一戸町	25	柳上遺跡	岩手県・北上市	43	天戸森遺跡	秋田県・鹿角市
8	野里遺跡	岩手県・一戸町	26	林崎館遺跡	岩手県・北上市	44	烏野遺跡	秋田県・熊代市
9	秋浦I遺跡	岩手県・岩手町	27	石曾根遺跡	岩手県・北上市	45	二重鳥C遺跡	秋田県・北秋田市
10	秋浦II遺跡	岩手県・岩手町	28	八天遺跡	岩手県・北上市	46	一丈木遺跡	秋田県・美郷町
11	倍田IV遺跡	岩手県・岩手町	29	横欠遺跡	岩手県・北上市	47	オノ神遺跡	秋田県・由利本庄市
12	間館I遺跡	岩手県・八幡平市	30	権山遺跡	岩手県・北上市	48	坂ノ上E遺跡	秋田県・秋田市
13	小山遺跡	岩手県・盛岡市	31	横町遺跡	岩手県・北上市	49	地蔵田B遺跡	秋田県・秋田市
14	上米内遺跡	岩手県・盛岡市	32	坊主峠遺跡	岩手県・北上市	50	松木台III遺跡	秋田県・秋田市
15	向館遺跡	岩手県・盛岡市	33	浜岩泉I遺跡	岩手県・田野畑村	51	上深沢遺跡	宮城県・大衡村
16	繫遺跡	岩手県・盛岡市	34	襲帯遺跡	岩手県・宮古市	52	笠舞A遺跡	石川県・金沢市
17	繫V遺跡	岩手県・盛岡市	35	清田台遺跡	岩手県・一関市			
18	柿ノ木平遺跡	岩手県・盛岡市	36	五十瀬神社前遺跡	岩手県・奥州市			

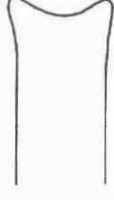
〈Ⅰ類：丸頭〉



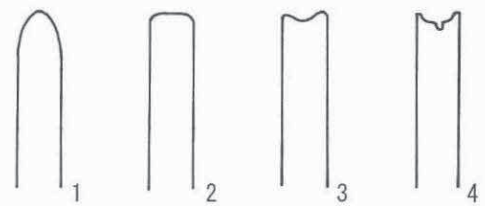
〈Ⅱ類：角頭〉



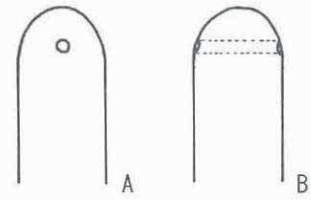
〈Ⅲ類：双頭〉



1. 正面の頭部形態



2. 断面形



3. 貫通孔の方向

第3図 斧状土製品の形態分類

な系譜関係が解明できる可能性がある。従って、本論では斧状土製品の集成と基礎的研究を行うことで、その様相を明らかにしたい。

2. 斧状土製品の分布と分類

1) 斧状土製品の分布

斧状土製品は、名前の由来の通り、磨製石斧のような形状を呈し、短冊形で楕円形もしくは隅丸方形の断面形で、端部に貫通孔を持ち、もう一つの先端部は平たく尖るのが特色である。大きさは、長さ11cm～17cmほどの規模を有する中形土製品である。今回は、斧状土製品の事例を52遺跡・213例集成したが（第1表）、これらの分布は、岩手県中部から北部を中心とする東北地方北部に偏在することがわかった。そのなかでも、岩手県の馬淵川流域や北上川上・中流域に多くの事例が集中する傾向があり、全体の約9割が岩手県内からの出土である（第2図・第1表）。一方、隣接する青森県や宮城県では、大衡村上深沢遺跡など僅か数遺跡で確認される程度である。日本海側の秋田県では、米代川流域から雄物川下流域にかけて散発的に事例が確認できるものの、1遺跡からの出土数は少なく、全体的に稀薄なあり方を示している。これより以南の地域では分布の広がり確認できなかったが、例外的に遠隔地での出土例が存在する。例えば、北陸地方の金沢市笠舞A遺跡（影山 2001）の出土例である。本資料は、「磨製石斧形土製品」として報告されているが、岡村道

雄（2009）が指摘するように、形態的に東北地方の斧状土製品と非常に類似しており、東北地方からもたらされたものと推測される。さらに、遺跡ごとの出土数に着目すると、通常は1遺跡1点～数点の出土であるが、その一方で20点を超える遺跡も認められる。例えば、一戸町御所野遺跡（高田 1994、高田・久保田 2004など）や、盛岡市上米内遺跡（佐々木・阿部ほか 1995）と盛岡市柿ノ木平遺跡（神原・佐々木ほか 2008）、花巻市久田野Ⅱ遺跡（藤井・橋本 1998）である。斧状土製品は、非常に限られた地域に分布する土製品のひとつと理解される。

このように、一つの地域に集中する土製品が周縁地域に拡散する現象をどう捉えらるべきであろうか。土器の場合、情報伝達や内容物の交換・交易、通婚圏などの観点から解釈されるが、装飾品としての土製品の場合は、土器とは異なって普遍的に使用されるものではなく、資源などの内容物を持たない。ましてや、「第二の道具」という性質上、その土製品の持つ象徴的意味を理解してはじめて有効性を持つものであることから、同じ原理のもとに広がったとは考えにくい。幾つかの背景が想定されるが、一つは装飾品として（他のモノと組み合わせられた状態も想定されるが）、交換・交易によって直接的もしくは間接的に他地域に搬入された可能性である。もう一つは、この土製品を身に着けた人が他地域に直接移動して、ある段階で廃棄された可能性である。いずれにしても、明確な論拠はないが、土製品の分布

における濃淡や遠隔地での飛地的分布現象は非常に興味深いと言えるだろう。

2) 斧状土製品の分類

本土製品は、単純な形態でありながら、幾つかのバリエーションが認められる。たとえば、貫通孔の位置は、長軸方向に穿つもの（A類）と短軸方向（B類）に穿つものの2種が存在する（第3図3）。形態的には、頂部形状は大きく3類に分類できる。丸形のもの（Ⅰ類）、方形ないしは隅丸形のもの（Ⅱ類）、双頭のもの（Ⅲ類）などがある（第3図1）。これらの頂部形態は、細かな部分では分類が難しいものも存在する。さらに、頂部の断面形状は、丸くなるもの（1類）、平坦になるもの（2類）、窪むもの（3類）、さらに窪みに沈線が沿うもの（4類）、がある（第3図2）。

文様は、ほぼ土製品の全面に施されるが、地文に縄文を施すものが多く、無文や沈線文・刺突文を加えるものも存在する。縄文は、無節・単節・複節があり、ほとんどが土製品の長軸方向に回転施文される。これらの文様を大きく分けると、地文だけのもの（a類）、地文縄文に沈線文を加えるもの（b類）、磨消縄文のもの（c類）、刺突文のみのもの（d類）、無文のもの（e類）、などに分けることができる。沈線文は、①逆U字状沈線文、②縄文帯によるアルファベット文、③円形文もしくは渦巻文、④蛇行沈線文、⑤蕨手状文、⑥対向弧線文、などがあり、多くは同時期の土器文様との共通性が認められる。このことも斧状土製品の特徴の一つと言えるだろう。

3. 斧状土製品の特色と変遷

1) 斧状土製品の種類と特色

今回の集成では、斧状土製品が52遺跡から213点の出土が確認できた（第1表）。それぞれの地域の典型例を図示して、その形態や文様、貫通孔などの特色を概観したい（第5図～第8図）。

（1）形態的特色

斧状土製品の形態は、上端部の形状から大きく3つに分類され、断面形は4つに分類される。上端部の正面形態は、丸形のもの（Ⅰ類）と角張る角頭のもの（Ⅱ類）、変形した2つの角を持つもの（Ⅲ類）、その他（Ⅳ類）に分類される（第3図1）。上端部の断面形は、凸状になるもの（1類）、平坦なもの

（2類）、やや窪むもの（3類）、窪んで沈線が加わるもの（4類）に分類される。

Ⅰ類は、第5図1～3・7・8・13～15・17、第6図4・6・7・11・12・15～18、第7図5～7・11・13・14・17・18、第8図1・3・6・7・11・13・14・16、があげられる。これらの丸頭の形態は、細かく見ると、尖頭形のもの（a類）、緩やかに丸くなるもの（b類）、頭部に角をもって頂部が丸くなるもの（c類）、頭部が横に膨らむもの（d類）、に細分される。各形態の境は微妙であるが、丸い頭部でも多様な形態が認められる。

Ⅱ類は、第5図5・18、第6図1・8、第7図1・10・12、などがあげられるが、丸形に比べて少ない。これらの角形のものなかでも、形態的に区分することができる。例えば、頂部が狭くなるもの（a類）、頂部が平になって角が丸みを帯びるもの（b類）、角がやや丸みを帯びるものの全体的に角張るもの（c類）がある。

Ⅲ類としたものは、岩手県宮古市袋帯遺跡（須原・戸根 2008）の出土例（第8図2）のみであるが、二つの角が付くものがある。この種の類例は確認できなかったが、非常に特徴的な形態である。

（2）貫通孔の特色

また頂部の貫通孔は、土製品の正面に対して、短軸方向に入るAタイプ、長軸方向に入れるBタイプに分類される。貫通孔が確認できた94例のうち、Aタイプは54点、Bタイプは40点であり、ややAタイプである短軸方向の貫通孔が多いようである。このような土製品における貫通孔の長軸・短軸方向の違いは、後期の鐔形土製品やスタンプ形土製品でも認められる現象である。このような貫通孔の穿孔方向の違いに意味があるかどうかは不明であるが、普遍的に見られる事象である。またこれらの貫通孔は、観察できたものを見る限り、目立った損傷や磨痕は認められない。

（3）大きさと重量

本土製品の大きさは、最も大形のもののは岩手県岩手町秋浦Ⅰ遺跡（古舘 2001）出土の資料（第5図1）であるが、破片資料でこれよりも大きくなる可能性のあるものが幾つか存在する。長幅比としては、5:1の前後にまとまるようである（第4図1）。長さの最大が17.2cmで、最小のものは11cmである。ま

た幅は、最大が6.8cm、最小のものは2.3cmで、3~4cm幅に集中する傾向がある（第4図2）。一方、厚さは、最大が4.5cm、最小は0.8cmであり、多くは1.5~3cmの厚さに集中する（第4図3）。

本土製品の重量が示されているものは、僅かであり、筆者が重さを計測したほぼ完形品2例を合わせても、完形品で重量が明らかなものは3例のみである。これらから、完形品では109.1g~138.8gの重さが確認でき、平均的に120gほどであると推測される。しかし、遠野市張山遺跡（佐藤 2006）では、欠損品ながら155.3gのものが報告されており、完形であれば少なくとも160gはあると推定される。

（4）遺存率

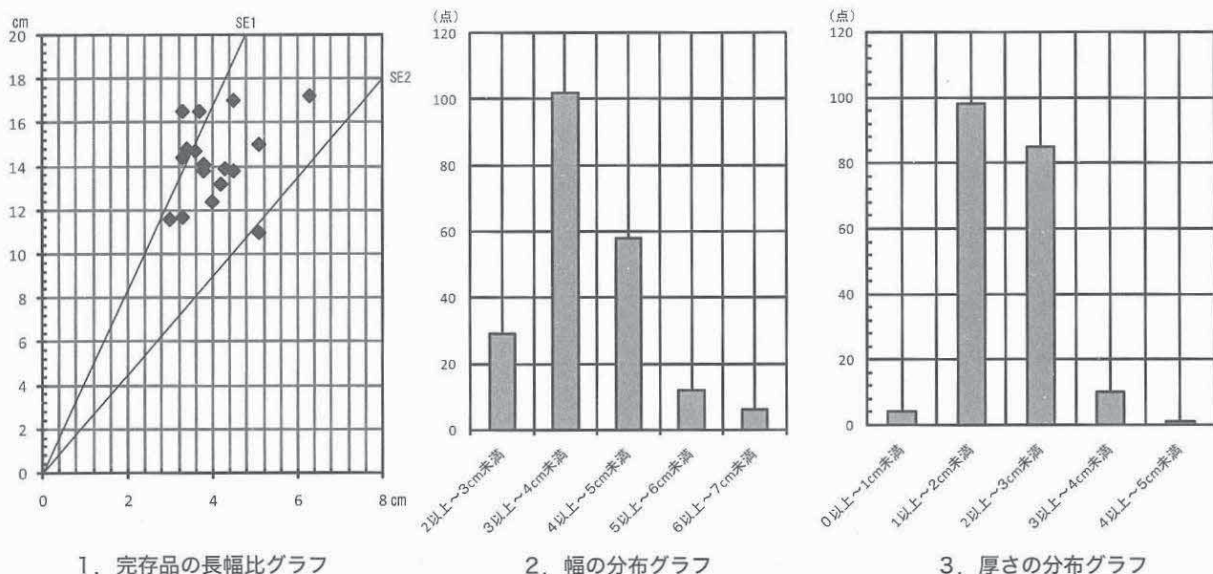
本土製品の遺存率は、213例中完形品が17例の約8%、70~90%遺存するものは6例（3%）、70%未満~50%遺存するものは38例（18%）、半分以下が152例（71%）である。これらの土製品は、単純な棒状を呈するわりに完存率が低く、9割以上の大部分が壊れた状態で出土することがわかる。このような破損率は、土偶と比べても大きく変わらない割合であると理解される。もちろん、廃棄後の埋没過程で人為的、自然為によって破損したものも含まれるだろうが、意外に遺存率が低いと言えるだろう。

2）斧状土製品の変遷過程

斧状土製品の変遷について、遺構出土資料を中心に検討する（第9図）。本土製品は、大木8b式新段階まで遡る可能性もあるが、明確に時期判別できるものは、大木9式古段階の事例である。

この段階の遺構出土資料は、岩手県花巻市久田野II遺跡20号住居跡（中村・千葉 2008）の出土資料があるが、大木8b式新段階に位置づけられる土器が出土している。斧状土製品は、地文に縄文LRを施し、貫通孔周辺に渦巻文、胴部に縦位の蛇行沈線文が垂下する（第8図2）。一方、秋浦I遺跡RA31住居跡（古舘 2001）からは、大木9式古段階の土器とともに出土している。この斧状土製品は、地文に縄文LRを施し、一面には貫通孔周囲の4面に逆U字状の沈線文が描かれ、下面だけ二重になる（第9図1）。もう一面は地文が疎らで、貫通孔の上面と下面に逆U字状の沈線文が描かれ、下面だけ二重になる。この段階にも、地文縄文だけの資料も存在するとみられるが、第9図3は一戸町馬場平2遺跡（高田他 1983）のC3住居跡出土の土製品である。本資料は、覆土上層から出土したもので、住居跡覆土からは大木8b式期の資料がまとまって出土しており、帰属時期は明瞭ではない。よって、その他の包含層出土資料からこの段階の可能性があると想定したものである。

大木9式新段階の資料は、岩手県宮古市袋帯遺跡（須原・戸根 2008）の8号住居跡出土資料と同14号住居跡出土資料がある（第9図4~6）。8号住居跡出土資料は、床面から斧状土製品が出土しており、両面に逆U字状の沈線文と区画内に縄文LRが認められる（第9図5）。充填・磨消手法かどうかは確認できていないが、深鉢の胴部文様との共通性が窺われる。14号住居跡出土資料は、埋土上層から斧状土製品が出土しており、両面と側面2面に逆U字状文



第4図 斧状土製品の大きさ



1：松ヶ崎（青森）、2・3：槻ノ木（I）（青森）、4・5：天戸森（秋田）、6：内村（秋田）、7～9：才ノ神（秋田）、10：二重鳥 C（秋田）、11：坂ノ上 E（秋田）、12：地藏田 B（秋田）、13：松木台Ⅲ（秋田）、14・15：一丈木（秋田）、16・17：上深沢（宮城）、18：笠舞（金沢）

第5図 斧状土製品の集成図（1）

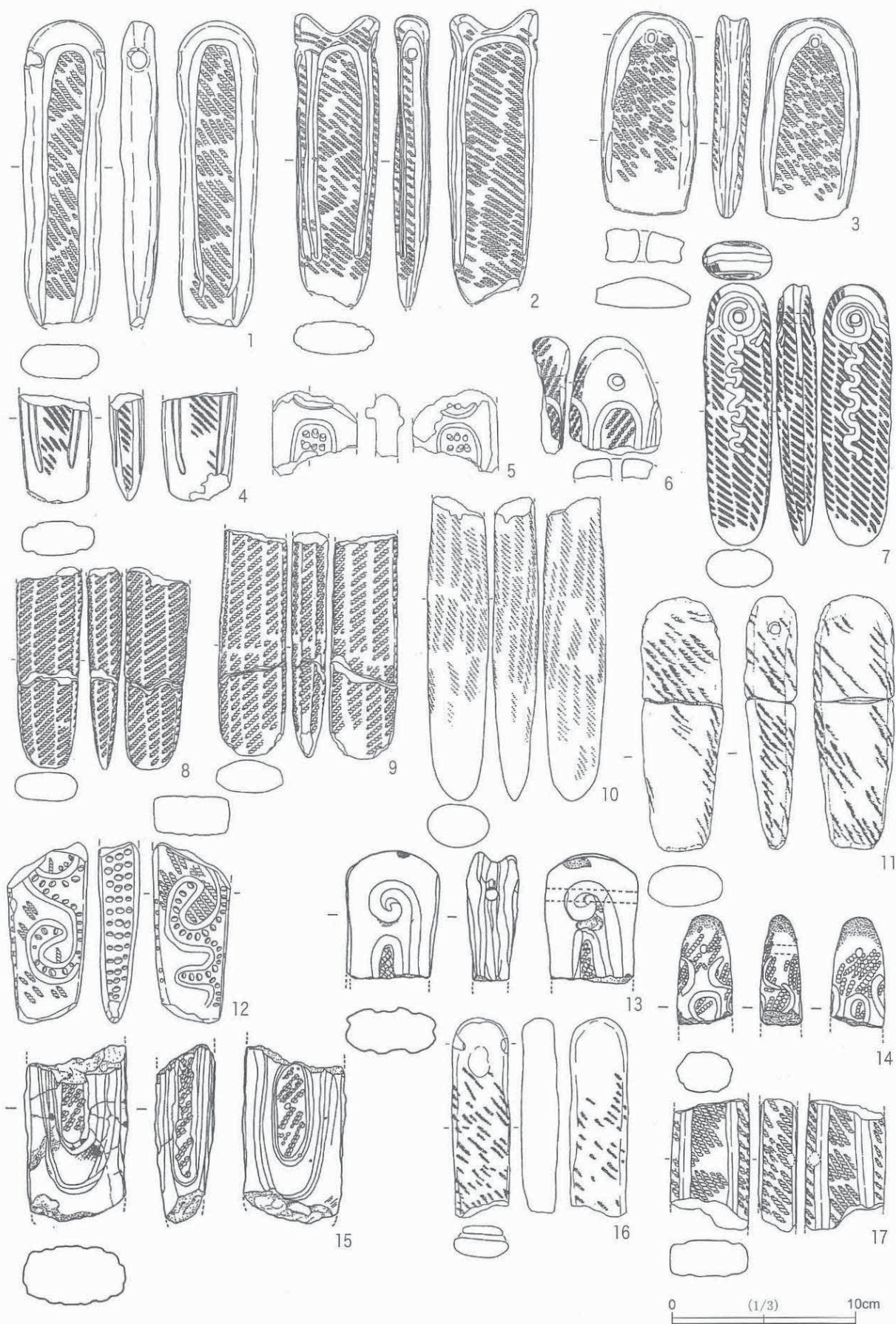


1～6：秋浦Ⅱ（岩手）、7～9・13：御所野（岩手）、10・16～19：柿ノ木平（岩手）、11：馬場平2（岩手）、12：
第6図 斧状土製品の集成図（2）



1～8：柿ノ木平（岩手）、9～11：繫（岩手）、12：繫V（岩手）、13・14・16：大館町（岩手）、17：小山（岩手）、18：川目 A（岩手）

第7図 斧状土製品の集成図（3）



1～3：袈帯（岩手）、4：横町（岩手）、5・6：柳上（岩手）、7～10：久田野Ⅱ（岩手）、11：五十瀬神社前（岩手）、12：清水（岩手）、13・14・16：張山（岩手）、15：上野平（岩手）、17：長谷堂（岩手）

第8図 斧状土製品の集成図（4）

を描き、地文に縄文LRが施される。同時期の深鉢の胴部文様と共通するものの、充填・磨消手法ではないようである（第9図6）。さらに、盛岡市上米内遺跡（佐々木・阿部 1995）RA92住居跡出土の斧状土製品は、胴部破片であるが、縦位の沈線文と蕨手状沈線文が施される。これらの文様は、大木9式土器に見られる要素であり、本段階に位置づけられると理解される（第9図6）。また、この段階にも地文縄文のみの斧状土製品が存在する（第9図7）。

大木10式期の資料は、岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡RA27住居跡出土資料がある（第9図8）。斧状土製品は、この住居跡の床面ピット埋土から出土しており、覆土からは大木10式古段階の土器片が伴出していることから、本段階に帰属すると推測される。この土製品に描かれる文様が、大木10式期古段階の土器に特徴的な縄文帯によるアルファベット文と共通していることから、本段階に位置づけられると考えられる。9も縄文帯によるU字状文になると推測されることから本段階に位置づけた。10は縄文LRを施すだけのものであるが、8と同じ遺構から出土しており、本段階に属すると考えられる。

これ以降は、明確に土器を伴う遺構出土資料がなく、文様から見ても大木10式中段階や新段階に帰属する可能性のあるものは認められない。このことから、斧状土製品は大木10式期古段階で姿を消してしまう可能性が高い。しかし、現段階では時期が比定できる資料数が少ないため、その終焉については今後とも検討の余地があるだろう。

以上のように、斧状土製品は大木9式古段階に出現して、大木10式古段階までの短期間で消滅すると考えられる。本土製品は、少なくとも3段階の変遷が認められたが、文様の変化に比べて、形態的变化に乏しく、時期的な形態変遷は明らかにできなかった。

4. 斧形土製品の機能・用途に関する考察

1) 「第二の道具」の捉え方

縄文時代の「第二の道具」と呼ばれるものは、機能・用途は不明であるが、形態から分類すると、①形象物、②装飾品、③携行品、④ミニチュア品、⑤楽器、⑥その他、が想定される。

行為との関係では、①固定（設置）型と②携帯型

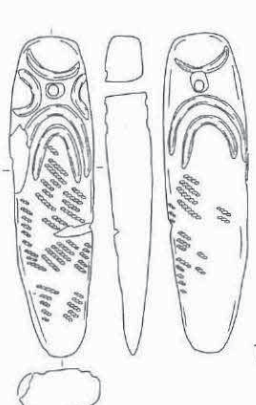
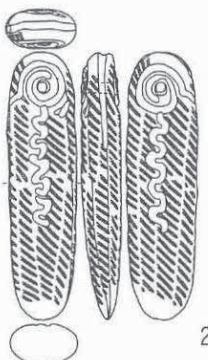
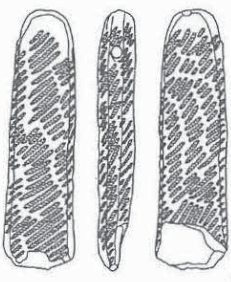
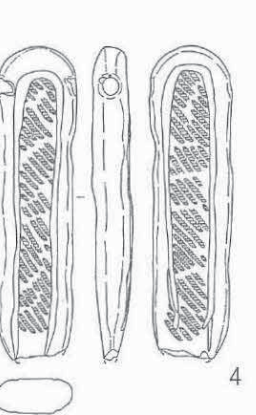
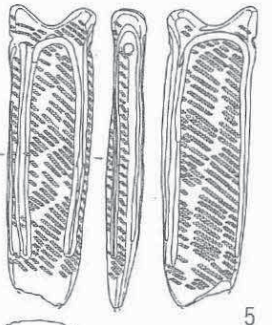
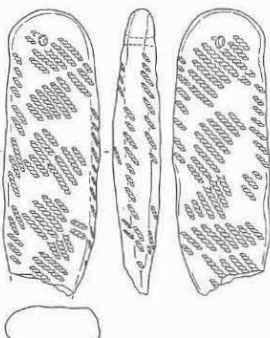
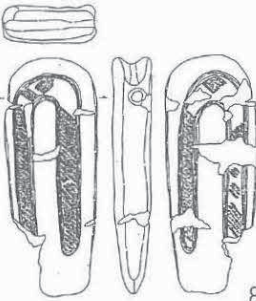
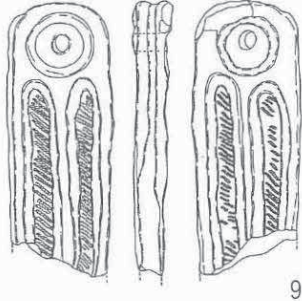
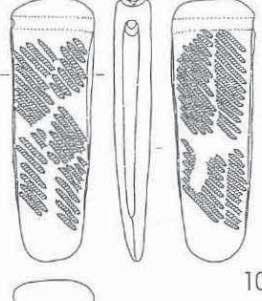
に分類される。携帯型は、日常的に携帯するものと儀礼行為などで臨機的に携帯する場合が想定され、手に持つものと、首や腰・腕・足などに装着するものなどがあると推測される。本論で扱う斧状土製品は、必ず貫通孔があることから、装飾品の類であると推測される。

2) 土製垂飾品の用途について

斧状土製品は、幾つかの資料を観察したものの、明確な使用痕跡は観察されなかった。一部の資料では、先端部に被熱による赤化が認められるものも確認できたが、製作工程における焼成時の赤化とみられ、その他の資料では普遍的に観察されるわけではない。このほか、漆や赤色顔料などの付着物も観察できず、土偶や耳飾のように赤彩などの塗彩を施した形跡も認められない。さらには、垂飾品と想定されるが、貫通孔周辺にも、紐ズレによる顕著な磨痕は認められない。以上のことから、使用痕からの機能・用途の解明はほぼ不可能であるため、ここでは形態的特色と出土状況から本土製品の用途を検討したい。

形態的特色は、斧状を呈しているが、これらが何を象ったものかが問題である。魚類であるという説もあるが、明確に魚の文様を施したものはない。文様の、土器に共通していることも、他の土製品には認められない特色と言える。さらに、赤彩等の塗彩が施されないことから、装飾性が乏しいとも言えるかもしれない。大きさは、長さ11cm～17cm、幅2.3cm～6.8cmで、重量は、多くが100～150gほどであり、垂飾品として利用されていたことが推測される。

本土製品の出土状況は、遺構外や住居跡覆土から出土するものが圧倒的に多い。そのなかでも、住居跡床面から出土する事例が10例ほど確認できるが、多くは、半部ほどしか残存していない破片資料であり、使用や遺棄のコンテクストを示しているとは考えがたい。完形品もしくはほぼ完形品の出土例は、柿ノ木平遺跡RA38住居跡と裳帯遺跡8号住居跡の出土例のみである。このことから、住居内で使用されたとは考え難い。また、墓坑と推定される土坑内から出土した例は確認できなかった。垂飾品と推測した場合、やはり被葬者が身に付けたまま埋葬されることも予想されるが、良好な埋葬遺構出土例が存在しないということは、確実に人が装飾品として身に付けていたとは言えない状況である。

	<有文>	<縄文・無文>
大木9式古段階		 
大木9式新段階	  	
大木10式古段階	 	

S=1/4

S=1/4

第9図 斧状土製品の変遷図

以上のことから、本土製品の機能・用途に関しては、懸垂できる貫通孔を持つことから垂飾品と推測され、人が装飾品（儀礼的な意味合いも有している可能性が高いが）として懸垂していたと考えられる。これらは、土偶が一時的に衰退する大木9式期から大木10式古段階に広がり、土偶が再び普及し始める大木10式期後半期には消滅する。この動態は、斧状土製品が持つ用途と土偶が少なからず関係していた可能性を想起させるのである。

5. 斧状土製品の出現の意義とその系譜

人類史において、垂飾品は玉類などから発生して、徐々に多様なものが派生していく。石製だけではなく、牙や骨角製などの装飾品も存在したと思われるが、その後の複雑化のなかで土製垂飾品も出現する。そのなかで、土製垂飾品である斧状土製品が、東北北部馬淵川流域や北上川上中流域の狭い範囲で、中期末葉に局地的な広がりをみせる（第10図）。後期になると、同地域では鐸形土製品や手形・足形付土版などが生み出され、後期中葉以降には、スタンプ形土製品や分銅形土製品などが普及する。これらは形態的に全く系譜関係がなく、時期的にも断絶が存在するものの、土製垂飾品として捉えると類似した装飾品として連綿と製作されたと理解することも可

能である。このような系譜関係の不連続性も、「第二の道具」の性質によるものと考えられる。

加えて、東北北部において、斧形土製品が発達する中期末葉は、ちょうど土偶が衰退する時期にあたる（阿部 2011a）。また本土製品が消滅した後に、大木10式期の終わりに再び土偶が作られるようになる。このことから、両者の関係性も注目されるところであるが、現状では土偶との直接的な関係性は薄いとみられる。

さらには、東北地方北部の中期の土製品は、土偶と耳飾などであり、垂飾品の類は少ない。中期末葉になって、装飾品と推測される土製品は、斧状土製品のほかにも、耳飾、三角壺形土製品、三角形土版など種類が多くなる。このような土製品は、後期初頭～前葉（前十腰内Ⅰ式期）には激減するが、後期前葉（十腰内Ⅰ式期）に入ると、鐸形土製品以外にも手形・足形付土版など、再び種類が増加傾向を示す。東北中部・南部では、これらの土製品とは対照的に、腕輪形土製品（土製腕輪）が広く分布する。この土製腕輪は、東北北部にも僅かに分布するものの、北秋田市漆下遺跡（菅野・利部他 2011）を除いて、客体的なあり方を示している。

このように、「第二の道具」は、観念的な領域で効果を発揮するが故に、「形態と機能はいかにも局

	斧状土製品	鐸形土製品	手形・足形付土版	スタンプ形土製品	分銅形土製品
中期末葉					
後期前半期					
後期後半期					

第10図 垂飾系土製品の推移

地的、あるいは時代的文化的一回性が強い」ものであり、「普遍性は見当たらない」(小林 1996) のである。よって、これらの局地的で、短期間で消長を繰り返すこれらの土製垂飾品のあり方は、「第二の道具」の特色として理解することができるだろう。

6. おわりに

今回、縄文時代中期末葉の斧状土製品について、集成と基礎的研究からその様相を明らかにしてきた。いわゆる「第二の道具」のなかの装飾品に含まれると推測されるもので、端部に貫通孔を有することから土製垂飾品として捉えられる。これらの土製品は、岩手県内に9割の資料が集中することから、極めて局地的分布を示す「局地型」の土製品であると言える。製作時期も、遺構出土資料から大木9式古段階～大木10式古段階の非常に短い期間に製作されたと推測される。機能・用途に関しては、懸垂して使用した可能性を推測したが、特徴的な使用痕や出土状況は確認できなかったため、明らかにすることはできなかった。

さらに、垂飾系の土製品という視点からまったく系譜関係はないものの、類似した懸垂可能な土製品が中期後半期から晩期にかけて、カタチを変えて連続と存在していることがわかる。課題が多く残ったが、当該地域の土製品研究に少しでも役立てれば幸いである。

以上、本論を執筆するにあたり、國學院大學名誉教授である小林達雄先生、本学教授である谷口康浩先生には、研究内容についてご教授いただいた。また、この他にも多くの方々より資料調査や研究に関してご意見をいただくなどお世話になりました。文末ながら感謝申し上げたい。

石井 匠、内川隆志、岡村道雄、加藤里美、加藤元康、菅野紀子、高田和徳、中村耕作、深澤太郎

引用参考文献

- 阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書6 アム・プロモーション
- 阿部昭典 2009a 「縄文時代における徳利形土器の祭祀的側面の検討」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 1～14頁
- 阿部昭典 2009b 「東北北部における「第二の道具」の多

様化」『平成21年度フォーラム環状列石をめぐるマツリと景観』國學院大學伝統文化リサーチセンター 1～12頁

- 阿部昭典 2010a 「縄文時代後期前葉における土偶の有脚化とその意義」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第2号 17～36頁
- 阿部昭典 2010b 「東北地方北部における石刀の顕在化」『國學院大學考古学資料館紀要』第26号 47～69頁
- 阿部昭典 2010c 「縄文時代の鐸形土製品に関する一考察」『相山林継先生古希記念論集』雄山閣 6～16頁
- 阿部昭典 2010d 「環状列石における「第二の道具」」『縄文時代の精神文化 第11回研究集会発表要旨集・資料集』関西縄文文化研究会 74～93頁
- 阿部昭典 2011a 「土偶有脚化とその意義」『第8回土偶研究会発表要旨集』土偶研究会 3～18頁
- 阿部昭典 2011b 「縄文時代の鐸形土製品の自然科学分析」『日本考古学協会発表要旨集』日本考古学協会38～39頁
- 阿部勝則 2004 「縄文時代中期の三角壙形土製品・三角壙形石製品について」『紀要XⅩⅢ』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 23～40頁
- 安藤文一 1983 「翡翠大珠」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣 218～230頁
- 遠藤正夫 1986 「青森県大石平(1)遺跡出土の「手形付土版」・「足形付土版」」『考古学雑誌』第71巻第4号 110～114頁
- 遠藤正夫 1987 「第X章分析と考察 第2節(2)土製品」『大石平遺跡Ⅲ』青森県教育委員会 416～417頁
- 岡村道雄 2009 『縄文人の祈りの道具—その形と文様—』日本の美術 No.515 至文堂
- 片岡由美 1983 「貝輪」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣 231～241頁
- 金子昭彦 2009 「北日本の祭りの施設と用具組成」『季刊考古学』第107号 30～33頁
- 川崎 保 1998 「玦状耳飾と管玉の出現—縄文時代早期末・前期初頭の石製装身具セットの意義」『考古学雑誌』第83巻第3号 1～29頁
- 川崎 保 2004 「玦状耳飾」『季刊考古学』第89号 17～20頁
- 北上市教育委員会 1983 「坊主峠遺跡発掘調査報告」『北上市立博物館研究報告』第4号 1～32頁
- 小林達雄 1977 「縄文世界のなかの土偶—第二の道具」

- 『土偶・埴輪 日本陶磁全集3』中央公論社 45～52頁
- 小林達雄 1996『縄文人の世界』朝日選書
- 設楽博巳 1983「土製耳飾」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣 206～217頁
- 高橋 潤 1976「鐸型土製品についての一考」『うとう』第82号 31～38頁
- 寺崎康史 1998「旧石器時代の垂飾と玉」『季刊考古学』第89号 47頁
- 長沼 孝 2010「装飾品と顔料」『講座日本の考古学2 旧石器時代（下）』青木書店 201～225頁
- 成田滋彦 1996「後期土版考」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター 39～48頁
- 松藤和人 2010「東アジアにおける後期旧石器文化の成立」『講座日本の考古学2 旧石器時代（下）』青木書店 583～606頁
- 【発掘調査報告書】
- 青森県教育委員会 1995『槻ノ木（1）遺跡』
- 村木 淳 1994「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市教育委員会
- 小保内裕之・小笠原善範1994『八戸市内遺跡発掘調査報告書7』八戸市教育委員会
- 小笠原善範 1995「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書8』八戸市教育委員会
- 遠藤勝博・高橋義介他 1982『田代遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- 高田和徳ほか 1983『馬場平2遺跡』一戸町教育委員会
- 高田和徳ほか 1983『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書IV—田中1遺跡、田中2遺跡、田中5遺跡—』一戸町教育委員会
- 高田和徳ほか 1993『御所野遺跡I』一戸町教育委員会
- 高田和徳・久保田滋子・中村明央 2004『御所野遺跡II』一戸町教育委員会
- 高田和徳・中村明央 2006『御所野遺跡III』一戸町教育委員会
- 中村明央・久保田滋子 2008『下地切遺跡・蒔前遺跡・野里遺跡・一戸城跡』一戸町教育委員会
- 菅原弘太郎 1979『五十瀬神社前遺跡』岩手県教育委員会
- 上野 猛・中川重紀他 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
- 三浦謙一 1983『湯沢遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
- 神 敏明ほか 1994『倍田IV遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木清文・阿部勝則ほか 1995『上米内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小原眞一 1995『柳上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鎌田 勉 1996『横町遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦・高橋與右衛門 1998『浜岩泉I遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 松本建速 1999『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 古舘貞身 2001『秋浦I遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木琢 2000『秋浦II遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 阿部勝則・平めぐみ 2001『長谷堂貝塚発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 酒井宗孝・阿部勝則 2000『上野平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 中村直美・北田 勲 2002『仁昌寺II遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村上 拓 2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小原眞一 2003『清田台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 須原 拓・戸根貴之 2008『褒帯遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 星 雅之・菅野紀子 2009『川目A遺跡第6次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 本堂寿一 1978『八天遺跡 図版編』北上市教育委員会
- 鈴木明美 1996『樺山遺跡』北上市教育委員会
- 稲村晃嗣 1997『横欠遺跡』北上市教育委員会
- 稲野裕介・菊池寛子 2006『横町遺跡』北上市立埋蔵文化財センター
- 佐藤浩彦 2006「張山遺跡」遠野市教育委員会
- 藤井敏明・橋本征也 1998「久田野II遺跡」『平成9年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』花巻市教育委員会
- 中村良幸・千葉 悟他 2008『久田野II遺跡—平成5年度～13年度発掘調査報告書—』花巻市教育委員会
- 中村良幸 1986『観音堂遺跡—第1～6次発掘調査報告書—』

大迫町教育委員会

小田野哲憲ほか 1992『林崎館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

武田将男・高橋文明・高橋憲太郎 1982『柿ノ木平遺跡－昭和50・51年度発掘調査報告－』岩手大学考古学研究室・盛岡市教育委員会

八木光則ほか 1983『柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

似内啓邦・千田和文・八木光則 1985『柿ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

神原雄一郎・佐々木紀子・佐々木亮二ほか 2008『柿ノ木平遺跡・堰根遺跡』盛岡市教育委員会

千田和文・八木光則ほか 1989『小山遺跡群－昭和63年度発掘調査報告－』盛岡市教育委員会

八木光則ほか 1984『繫遺跡－昭和58年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

千田和文・八木光則・似内啓邦 1986『繫遺跡－昭和60年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

三浦陽一ほか 1995『繫遺跡－平成5・6年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

津嶋知弘・富野秀文・黒坂知弘 1996『繫遺跡－平成7年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

津嶋知弘ほか 1998『繫遺跡－平成8年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

八木光則・千田和文ほか 1981『大館遺跡群－昭和55年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

八木光則・千田和文ほか 1983『大館遺跡群 大新町遺跡－昭和57年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

千田和文・八木光則ほか 1993『大館遺跡群 大館町遺跡－平成4年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

似内啓邦・太田代由美子ほか 1997『大館遺跡群 大館町遺跡－平成6・7年度発掘調査概報－』盛岡市教育委員会

小野寺哉志子ほか 1997『中野台』大東町教育委員会

秋元信夫ほか 1984『天戸森遺跡』鹿角市教育委員会

富樫泰時・橋本高史 1980『才の神遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会

畠山憲司 1981『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会

和泉昭一 1998『烏野遺跡第7次発掘調査概報』二ツ井町教育委員会

柴田陽一郎 2001『松木台Ⅲ遺跡』秋田県教育委員会

菅野美香子・利部 修他 2011『漆下遺跡』秋田県教育委員会

菅原俊行・安田忠市 1984『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上E遺跡・湯ノ沢C遺跡・湯ノ沢H遺跡』秋田市教育委員会

菅原俊行・安田忠市 1986『地蔵田B遺跡 台A遺跡 湯ノ沢I遺跡 湯ノ沢F遺跡』秋田市教育委員会

後藤勝彦ほか 1978『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ 上深沢遺跡』宮城県教育委員会

景山和也 2001『笠舞A遺跡 第7次発掘調査報告書』金沢市教育委員会